

神宮と伊勢のまちを伝える

O I S E S A N N E W S

お伊勢さんニュース

伊勢文化舎 / 〒516-0008 三重県伊勢市船江 2-22-25 TEL 0596-23-5166 FAX 0596-23-5241 E-mail otayori@isebito.com

倭姫宮ご鎮座百周年
記念号

第1号



- 企画・発行 伊勢文化舎
- 発行部数 5万部
- 協力 神宮司庁 神社本庁



国史絵画「皇大神宮奉祀」矢沢弦月（神宮徴古館蔵）

倭姫宮ご鎮座百周年奉祝

二千年の時空を越えて、 倭姫と出合う旅

多くの働きをされた皇女倭姫命。
謎の多い命の人物像を探り、
命が発する伝言を聴く。

神宮と伊勢の情報紙を復刊

先のご遷宮から、ちょうど十年が経ちます。伊勢の町々では早くも木遣り唄が聞こえるころになりました。このような折、今年「倭姫宮ご鎮座百周年」(大正十二年)を迎えます。

この度、神宮と伊勢のまちを伝える文化情報紙「お伊勢さんニュース」(旧「いせびとニュース」)を、神宮はじめ各関係者の皆様のご協力ご支援を得て復刊することになりました。本紙だけでなく参加型のイベントの企画もしております。どうぞ、ご期待下さい。

伊勢に住まう者にとり、倭姫さん(倭姫宮)はとても近いお宮です。五月五日と十一月五日の例大祭には例年老若男女の参拝者らでにぎわいます。とくに五月の大祭には祭典のあと、和紙の鯉のぼりが授与されることもあり、これを受ける参拝者の長い行列が参道をうめ、すっかり初夏の風物詩となっています。

ところで、今から二千年前のこと、倭姫宮の御祭神・倭姫命は天照大御神の御杖代として永遠の地をもとめて長い旅の末、五十鈴川のほとりに大神をお鎮めになりました。その後も年中の祭りを定め、神宮の神田や御塩、アワビ等の御料地もお定めになりました。この他、伊勢志摩地域には、倭姫命の伝承地が数多く残り、地元民によって今も語り伝えられています。

しかし、肝心の人物像については謎に包まれています。また、命が私たちに伝えたことは何だったのでしょいか。

「神話的想像力」を働かせて、一緒に「倭姫と出合う旅」に出かけませんか。

目次

- 2面 伊勢の神宮と倭姫命
- 3面 倭姫命の面影(前編)
- 4面 倭姫命はどんな人物か?
- 5面 倭姫命に魅せられた人々
- 6面 倭姫の巡行 大和から伊勢へ
- 7面 近世における倭姫命奉祀
- 8面 伊勢志摩のまつり暦・ご案内

神都・伊勢の恩人、井戸を掘った命

ご鎮座百周年を迎える伊勢神宮別宮の倭姫宮。 異例の新宮創建には、ご祭神の倭姫命の功績が大きかった。

伊勢神宮で最も新しい別宮である倭姫宮。伊勢神宮の百二十五にのぼる宮や神社のほとんどが千年以上の歴史をもつ中であって、百年はいかにも新しい。しかし、この別宮の創建は神宮関係者や伊勢の人々にとって長年待ち望んでいたことであった。

倭姫命は、第十一代垂仁天皇の娘（皇女）、母親は日葉酢媛命という。兄にはのちの第十二代の景行天皇がいる。皇族の女性が伊勢神宮の別宮の

ご祭神として祀られるには、どのような理由があったのだろうか。「伊勢の人々にとって、倭姫命は井戸を掘ってくれた恩人なのです」と、伊勢の古老は教えてくれた。

古老は、井戸水を飲む時には、井戸を苦勞して掘った人に感謝するように父親から教わってきたと言葉を続けた。水を飲むとき、その水源のことを思う意から「飲水思源」という言葉がある。物事の基

倭姫命。さらに神さまの祠を建てたのも倭姫命と伝わるのである。伊勢神宮の始まりにこれほど深く関わっていた皇女であるのに、それを祀るお宮がないことに厚志の人々は異議を唱えていた――。

旅する皇女、旅する神

伊勢神宮の創建という大役を担った倭姫命。そもそも父の垂仁天皇より天照大御神の御杖代となる命が下つたからである。「御杖代」は言葉通り、天照大御神の杖の代わりとなって、大神に奉仕する。のちに斎王と呼ばれるように。初代の御杖代は第十代崇神天皇の皇女の豊鍬入姫命であった。倭姫命の叔母にあたる豊鍬入姫命が高齢となったため、そのお役目を倭姫命が引き継いだのである。

では、皇室の祖先につながる神、天照大御神に御杖代が必要となったのはなぜか。その背景も、「日本書紀」に語られている。第十代崇神天皇の時代、疫病が流行り、国の民の半分近くが息絶えようとしていた。そこで天皇は、神の祀り方が悪いのではないかと考えたのである。古代社会では、神を祀ることが政治の根本とされていた。政治を「まつりごと」というのはそれゆえのこと

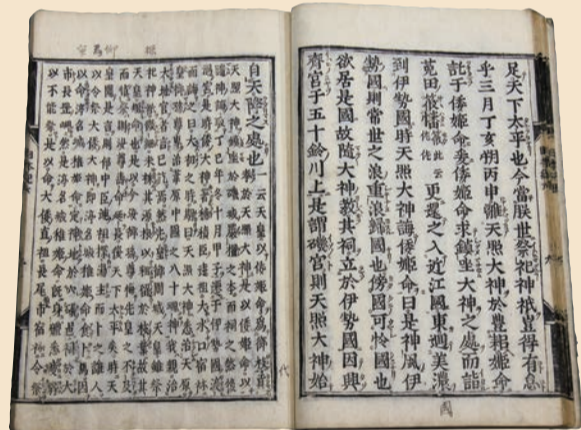
とだ。難しい言葉だが、「祭祀と国家の政治が一致する形で、司祭が王となる。今のパチカ市国の教皇やチベットのダライ・ラマという存在がイメージしやすいかもしれない。

崇神天皇は、自らの皇居内に天照大御神を祀っていたが、しかるべき聖地、大和の笠縫邑（奈良県桜井市あたり）にうつした。その際、皇女である豊鍬入姫命を御杖代として付けたのである。それで疫病はひとまず収まる。

そして、次の垂仁天皇の時代天皇はもつと豊かな社会にしたいと、大神をさらなる聖地に祀るため、豊鍬入姫命に代わり、自らの娘である若い倭姫命を御杖代にしたのである。

さらなる聖地を探す倭姫命の旅は「倭姫命巡行」といわれる。古代のプリンセスの旅はどのようなものだったのか。

これも『日本書紀』に記されている。倭姫命に付き従う



『日本書紀』（神宮文庫蔵）

側近として五大夫（五人の重臣）を伴った一行は、大和の笠縫邑を出発し、宇陀の篠幡（奈良県宇陀市）からぐるりと近江国（滋賀県）、美濃国（岐阜県）と巡り、伊勢国（三重県）に入り、五十鈴川のほとりにたどりついたという（P6地図参照）。大和から伊勢への旅程は最短ルートではなく、宇陀の山奥に一旦行き、引き戻すように北上し、滋賀の琵琶湖あたりまで至り、岐阜を経て、三重県の伊勢平野を南下するルートを取っている。わざわざ遠回りするには、目的があったように見受けられる。

倭姫命巡行は、平安時代の文献『皇太神宮儀式帳』にも述べられている。それによれば、巡行地は十四カ所にのぼり、伊賀国（三重県）も加わっている。旅の途中では、土地の有力者から御田（神領の田）や神戸（神社に所属して経済を支えた民）が献上されている。

さらに鎌倉時代中期の『倭姫命世記』では、巡行の期間、様子も詳しく記している。長いところでは数年かけて滞在



新穀を大神に捧げる神嘗祭



天照大御神を祀る皇大神宮（内宮）正宮

伊勢神宮の始まりは、今から二千年前。日本神話の『日本書紀』に記されている。「この神風の伊勢国は、常世の浪の重浪帰する国なり。傍国の可憐し国なり。この国に居らむと欲ふ」（神風の伊勢は、理想郷である常世の波が寄せる地。大和から離れた、美しい地。この地に居りたい）。天照大御神のご神託が下つたので、五十鈴川の川上にその祠を建てたという。伊勢神宮の創建についての重要な神のお告げを聞いたのは、じつは

伊勢の神宮と

明治13年(1880)、明治天皇の御聖断を仰ぎ、伊勢神宮の遥拝所として建てられたのが「東京皇大神宮遥拝殿」、いまの東京大神宮です。皇室の御祖神である天照大御神をまつり、国民の総氏神と仰がれる伊勢神宮(内宮)の御神徳を皇都東京にあまねく宣布し、都民の心のよりどころとなるようにとの願いから創建され、140年余の歳月が流れました。「東京のお伊勢さま」東京大神宮は、いまも伊勢神宮と都民の心を結んでおります。



東京のお伊勢さま



東京大神宮

〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-4-1
電話 (03) 3262-3566 FAX (03) 3261-4147
http://www.tokyodaijingu.or.jp/

JR総武線・地下鉄東西線・有楽町線・南北線・大江戸線
「飯田橋駅」徒歩5分

倭姫命

やまとひめのみこと

文／文筆家 千種清美

していたようだ。例えば、伊賀の穴穂宮では四年滞在し、近くの川で獲れた鮎を大神に捧げたことが書かれている。穴穂宮と比定(推定)される伊賀市の神戸神社では今も六月の伊勢神宮月次祭に干鮎を献じており、関わりは続いている。大和王権のプリンセスが、各地に滞在しながら、天照大御神をお祀りし、ご神託を待つ。その間には現地の人々と交流もあったようだ。巡行地を訪ねると今も、豊かな水田が広がる地域が多い。おそらく稲作や機織りといった当時の先端の技術も伝授しながらの旅だったのかもしれない。

神宮の「かたち」を作る

一方、伊勢に來られた倭姫命は、さらに各地を巡る。次なる目的は、天照大御神に供える食材を提供する御贄地を定めるのである。祭典には、供え物である食材は欠かせない。倭姫命は、五十鈴川のほとりから各地へ出向く。伊勢市楠部町に。塩は五十鈴川河口の伊勢市二見町に。極上の海の幸であるアワビは、鳥羽市市崎町に。それぞれの土地で産する食材は、今も伊勢神宮の祭典で供えられている。

また、伊勢神宮の神嘗祭をはじめとする祭典や、別宮や摂末社なども定めたと伝わる。伊勢神宮の今に続く「かたち」を倭姫命が作っていったのである。倭姫命は歴史も担っていた。『古事記』『日本書紀』には、伊勢神宮の斎王としての倭姫命が登場する。日本神話のヒーローである倭建命(『日本書紀』では日本武尊)

ら伊勢にまつられるのである。以来、大神は伊勢にお鎮まりになり、動くことはない。

を助ける叔母として、熊襲(九州南部)征伐からさらに東国征伐へ向かう、甥の倭建命に神劍を渡す場面だ。神劍は旅の途中、駿河国(静岡県)で窮地に陥った倭建命を助ける。一説では、劍が自ら抜け出して命の傍らの草を薙ぎ払い、これによって難を逃れた。そのため、その劍を草薙劍と呼ぶようになったという。

ここでは伊勢神宮の大神の靈威を担う倭姫命の力が語られている。各地を巡る旅をした皇女は、伊勢神宮の基盤を形作り、さらに大いなる靈力をも持つようになっていたのである。倭姫命が掘った井戸は深いのだろう。そのため二千年を経た今も、井戸の水を私たちは飲ませてもらっていると思える。

伊勢の井戸を掘った人、倭姫命に感謝する別宮が倭姫宮である。



御塩浜での採鹹作業

御塩浜での採鹹作業

倭姫命の面影

前編

文／皇學館大学名誉教授 櫻井治男

毎年、五月五日と十一月五日が近づくと、伊勢市駅と宇治山田駅前、そして倉田山の神苑に立てられた「奉祝倭姫宮大祭」の幟が、人々を手招きするように風に靡きはじめる。初夏と錦秋のこの日は、皇大神宮(内宮)の別宮、倭姫宮の祭りである。普段のお参りとは少し違った、御祭神「倭姫命」との晴れやかな出会いの機会となっている。

倭姫が伊勢の地を恒久祭場として天照大御神を鎮祭されたのは遙か二〇〇〇年前頃の出来事と言ふ。一方、倭姫宮の誕生は令和五年(二〇二三)が一〇〇周年にあたり、この時差にある種の不思議さを感じるのではないだろうか。

人・神としての倭姫命

奈良時代に編纂された『古事記』『日本書紀』平安時代の『皇太神宮儀式帳』鎌倉時代の『神道五部書』などの文献に倭姫の御名はしっかりと記されている。そればかりではない、倭姫に縁りあると伝える在地の口碑伝説にも名前は記憶されてきた。しかしながら、その実像を捉えることは難しく、むしろ倭姫に対して「人であり神である聖なる



倉田山に鎮まる倭姫宮

倭姫命の旅は、『書紀』と『儀式帳』では巡行路の基本構図は変わらないが、後者では場所が増加している。やがて『世記』の時代になると基本構図をのみみ出す巡行先が登場するとともに、各所での出来事がストーリー性を帯びるようになる。ところが、倭姫の旅は、いわゆる「聖地巡礼」に見られるような苦行や厳しい試練を伴っていたという語りではない。「阿佐賀国」(松阪市)での荒ぶる神との緊張した対峙場面があつても、闘争ではなく祭祀を営むことで事態が収まっている(『世記』)。「巡礼」は倭姫命の面影を求め現在の探索者に委ねられた旅のあり方かもしれない。

ところで、神々の旅の話題には、伊和大神のように自ら各地の巡行を終えて鎮まった地が実は出発点であった(『播磨国風土記』)という場合もある。皇女の旅は、大和を起点に伊勢が終着という点では異なるパターンとなるが、現実世界のミヤコ(都)から「常世の波」が打ち寄せる理想世界のイセへの旅という「偉業」は、「聖なる人・神」である倭姫命だからこそ担えた重責ではなかっただろうか。



神前海岸。岬に神前神社が鎮座

(ちくさきよみ)……文筆家、皇學館大学非常勤講師。NHK津放送局、三重の地域誌「伊勢志摩」編集長を経て独立。著書に『女神の聖地 伊勢神宮』(小学館新書)、『伊勢西国三十三所観音巡礼』(もう一つの伊勢参り) (風媒社) など多数。三重県文化審議会副会長。祭祀舞教室「千の会」代表。

(さくらい はるむ)……皇學館大学名誉教授。専門は宗教社会学、近代神道・神社祭祀研究。2018年、南方熊楠賞受賞。著者に『地域神社の宗教学』『知識ゼロからの神社入門』『日本人と神様』ゆりやかで強い絆の理由』など。日本宗教学会評議員・NPO 法人社叢学会理事長。



伊勢名物 赤福

本店 〒516-0025 伊勢市宇治中之切町26番地
電話 0596-22-2154(代) ファクシ 0120-081-381
<https://www.akafuku.co.jp>



伊勢内宮前
おかげ横丁
おかげさまで
30周年



倭姫命は どんな人物か？

文／文筆家 千種清美

古代の皇女、倭姫命のものと伝わる
言葉を引いて、メッセージを読み解く。

東国征伐へ 向かう倭建命へ

倭姫命が日本神話に登場した際、甥の倭建命にかけた言葉が知られている。

倭建命は大和から東国へ向かう途中、伊勢神宮に立ち寄り、叔母の倭姫命と対面する。その際、『古事記』では嘆き悲しむ倭建命の姿が記され、一方、『日本書紀』では父の命を果たすべく東国征伐への意欲を倭姫命に堂々と告げるのである。倭建命の描き方は記紀によってそれぞれ異なる

が、倭姫命はどちらも甥が担う大役を受け止め、送り出している立場は同じだ。

『日本書紀』の倭姫命の言葉が、その人柄を表しているように思う。

「慎みてな怠りそ」（慎むことをおこたつてはいけません）。戦に赴く甥に、天叢雲剣（のちの草薙剣）を授け、さらにはなむけとして贈った言葉である。短い言葉ではあるが、常に身を慎み、なまけることなく、精進せよとは、私たちの日々の暮らしのなかでも大切に、人生訓にもした

丹き心、墨なき心、神に仕えるには

いと思った。この「慎みてな怠りそ」は、平安時代初期の文献『古語拾遺』にも載る。

古代にあっても、倭姫命の言葉として知られていたことが伺える。

また、鎌倉時代中頃にまとめられた『倭姫命世記』という文献は、倭姫命の事績や古伝承が多く記されている。そこにも言葉が残っている。

もと右の物は右にして」。墨心と丹心を対比させて、色彩の黒と赤で、善悪を巧みに表している。古来の習わしに従って、万事違うことがないようにと、神に仕える心のあり方を述べている。

そして、「元を元として、本を本とするが故なり」（起源を起源とし、根本を根本とするから）。旧例や旧制を守る姿勢、原点を大切にすると

いう考えをしっかりと説いている。そして、この「元を元として」という言葉は、倭姫命が亡くなる際にも述べられており、さらに、「神の恵みはお願いの度合い次第で、正しく素直であることが大事」と続く。神からの恵みは、正直であることが大事と説いている。正しく直きこと、倭姫命は最期に大きなメッセージを発していた。



木彫倭姫命（板倉白龍作・神宮徴古館蔵）

によると、垂仁天皇の二番目の皇女で、生まれ

た時からたいへんな美貌で、幼い時から分別があり、気が利いて優れている、性格ははっきりしている、思い切りがよく、天照大御神の御心に通じている。そこで、御杖代として、大神を頭にいただいている。

幼少の頃から、天照大御神の御心に通じているとは、大神のお声を聴くことができた稀有な存在だったと思われる。将来を嘱望され、美しく、はつらつとした女性として成長した古代のプリンセス。倭姫命は、天照大御神の御杖代としてのお役目を慎重に、そして果敢に果たしていたのではなかっただろうか。

長した古代のプリンセス。倭姫命は、天照大御神の御杖代としてのお役目を慎重に、そして果敢に果たしていたのではなかっただろうか。

倭姫宮の参道は、小鳥のさえずりが聞こえ、明るい。木漏れ日の参道を歩くと、倭姫命の懐に入っていくような安心感が得られる。そして、社殿に参ると、時おり、鳥が社殿の屋根の千木に止まっていることがある。

神さまのお使いのように思うのも、古代の皇女のお宮だからだろうか。

倭姫命は、多くのメッセージと豊かなイメージで、天照大御神のご鎮座地を探る巡行に光をあてていた。

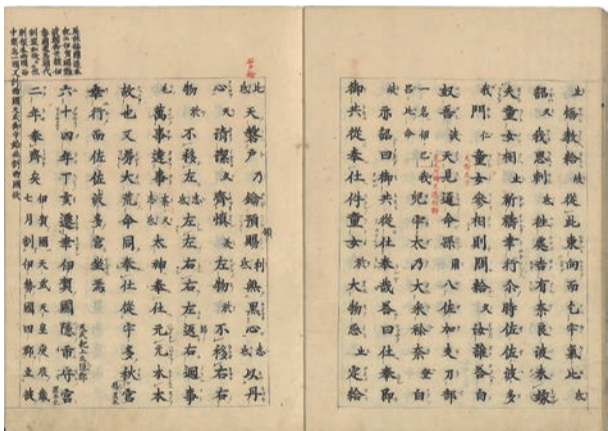
参考文献
中村幸弘著『倭姫命世記の研究』新泉社 平成24年



和紙人形 倭姫命（阿部夫美子作）

「墨心（汚い心）をなくして、丹心（良い心）によって、慎重に身を潔斎して、左の物を右に移すことなく、右の物を左に移すことなくして、もともと左の物は左にし、もと

また、言葉ではないが、『倭姫命世記』の一書には、倭姫についての記述がある。それ



『倭姫命世記』（神宮文庫蔵）



◆本店 伊勢市本町13-7(外宮表参道)
電話 0596-23-3141
8:30~17:00 年中無休
2階 / あそらの茶屋
電話 0596-65-6111
朝かゆ 7:30~10:00
昼げ 11:30~14:30
◆内宮前店 伊勢市宇治中之切町87
電話 0596-28-0081
9:00~17:00 年中無休

本社
伊勢市上地町2691-13
☎0120-00-0707
8:30~17:30
土・日・祝日定休
Website <https://www.sekiya.com>

豆腐庵山中
伊勢市宇治中之切町95番地
電話 0596・23・5558 木曜定休



「大和から伊勢への巡行に何十年もかかって、倭姫は何人が交代しているという説もありますが、一人の女性と解釈して演じています」。

劇団伊勢

倭姫命をテーマに五作目
第七九回公演
「倭姫〜二千年の紡ぎ」



倭姫命・阿部夫美子作
(おかげ横丁・神話の館)

伊勢の恩人である
倭姫命に、
敬愛の念を抱く
アーティストたち。
作品を通して、
表現者としての
思いを聞いた。

神都の歴史を刻んだ彫刻家 一七八一体の倭姫命像

いたくらははくりゅう



神宮復古館に展示される「倭姫命木彫」。復古館には四体の命像が収蔵されている。

温かい眼差しを投げかけ、僅かな笑みを浮かべた倭姫命像。そのどれもにも命の気高い心が感じられる。
白龍氏は、三十歳で造神宮使庁(神宮の造営を司る役所)に奉職。昭和四年の神宮式年遷宮では造営に奉仕し、御用材との出会いから彫刻に興味を抱き、郷土の彫刻家・橋本平八に師事する。日頃から倭姫命を敬慕

倭姫命に魅せられた人々

文芸・芸術にみる倭姫像



現在団員は18人。20歳前半から70代まで個性豊かなメンバーが集まる。チームのまとめ役・佐藤太亮団長。

今年十二月に控える公演は「倭姫〜二千年の紡ぎ」。二千年前の倭姫命の巡行、百年前にお宮創建に尽くした人々、そして現代の伊勢と、それぞれの時代で、懸命に生きる姿を演じるという。「命は神様ですが、観客の皆さんに劇中へと入り込んで欲しいので、現代の言葉で綴り、人間味のある登場人物となつていきます」と佐藤太亮団長(69)。

今年、創設六十周年を迎える「第33回ふるさと三重文化賞」を受賞。地域に根付いた作品で伊勢の魅力を伝え続ける。感有共有して挑む。

今年、創設六十周年を迎える「第33回ふるさと三重文化賞」を受賞。地域に根付いた作品で伊勢の魅力を伝え続ける。感有共有して挑む。

伊勢だからこそ手がけた 神様シリーズ あまてらすおおみかみ 天照大御神を導いた倭姫命

阿部 和紙人形作家 夫美子さん



制作は夜が多い。静かに人形と向き合い、手を動かしている。煩わしいことも全て吹き飛ばすという。

「神様をつくるには緊張感を持って向き合います」と、和紙人形作家の阿部夫美子さん(82)。姿勢を正して取り掛かり、手は絶えず洗い清めるといふ。何よりも重要視するのが神の威厳と品格で、顔を作るのに「一月ほどかかることもある。



「天地人」は平成21年の宇治橋架け替え奉納演奏に始まり、倭姫宮例大祭でも津軽三味線の奉納演奏を行なう。倭姫宮のある倉田山に親しんだ廣さんは、5月例大祭の鯉のぼりが幼い頃の思い出。

岩手出身の津軽三味線奏者・黒澤博幸さんと秋田出身の大間ジローさんによるユニット「天地人」と伊勢出身のソプラノ歌手・廣めぐみさん(49)が平成25年にリリースした「奉讃曲 倭姫命」。巡行地をたどってつくりました。東北でも復興を願う特別に演奏しましたが、新たな勇氣を抱く機会にもなりました」と思いを込める。

東北から倭姫の思いを曲に マキシシングル「奉讃曲 倭姫命」

東北アーティスト ソプラノ歌手

「天地人」と廣めぐみさん

今年も十一月の倭姫宮の例大祭で奉納演奏を行う。

谷分道長さん

歌人
たにわけ



神様シリーズを全て収録する『和紙夢現』は創作活動45年の写真集。



還暦と神宮奉職30年の節目に手がけた歌集『森の音楽』巻末に「倭姫命讃仰」を収録。「懐みて怠らず」を信条とし、ひた向きな歌詠みの世界がそこにある。

清き明き まごころ捧げ 菰郁と かをり溢るる 谷分道長さん(75)は神宮に奉職してから短歌をはじめ、歌人の佐藤佐太郎に師事。昭和五十四年の宮中御歌会始で預選の光栄に浴し、「歌人生に弾みがついた」といふ。倭姫宮には計十年奉仕し、多くの歌を詠んだが、「倭姫命讃仰」は特別な思いの歌。その歌を、振り付して各地で奉納した舞踏家や躍動感ある作品にしたためた書家もいる。「思いがけず広めてくれて、ありがたいことです。歌から刺激をもらいます」と話す。これまでの出会いを倭姫命がつないでくれたと感謝し、今も毎月例祭に参列し、お宮の森を歩いている。

私の旅行スタイル、ふるさと納税。

鳥羽市ふるさと納税

検索

鳥羽に旅行するなら「宿泊観光周遊券」が絶対お得！
寄附金額の3割分の宿泊観光周遊券をお贈りします。

鳥羽市観光協会



二軒茶屋餅

一五七五年創業



毎月25日は「黒あんの日」

伊勢市神久6丁目8番25号
●電話 0596-23-3040
●営業時間(年中無休)
午前8時～午後6時(売り切れ次第終了)
<https://nikenjyamochi.jp/index.html>



倭姫の巡行

大和から伊勢へ

大和で祀られていた天照大御神は、どのようにして現在の地に鎮座されたのか——。倭姫の長い旅路をたどってみよう。



三輪山が御神体の大神神社

倭姫命の御杖代としての巡行（巡幸）の道筋を伝える資料としては、主なものに『日本書紀』『皇太神宮儀式帳』『倭姫命世記』がある。

（八〇四）撰進の『皇太神宮儀式帳』には、十四カ所の巡行地が記載されている。一方、鎌倉時代に成立したとされる『倭姫命世記』には、倭（大和）の笠縫邑で長い間天照大御神をお祀りされた豊鍬入姫命の巡行がまず記され、次いで倭姫命が巡られた二十カ所が記されている。

このように資料による違いはあるが、大和から近江へ北上し、東に向かって美濃を経て伊勢へ南下するという経路は概ね共通している。ここでは『倭姫命世記』（以下『世記』と略）によって、巡行の道筋をたどってみよう。

永遠の宮地を求めて旅立つ。側近として、安倍・和珥・中臣・物部・大伴という名だたる一族の五人の重臣たちが同行したことが記されている。まず向かったのは『書紀』が記す菟田（宇陀）である。



『倭姫命世記』による巡行地

1 倭の笠縫邑（奈良県桜井市）
三輪、檜原神社か）
2 丹波の吉佐の宮（京都府宮津市大垣、籠神社か）
ここで四年間祀られた時、豊受大御神が天上より降りられ、天照大御神のお食事の世話をされたことと記している。
3 倭の伊豆加志の本の宮（桜井市初瀬、與喜天満神社か）
4 紀の奈久佐の濱の宮（和歌山市秋月、日前國懸神社か）
5 吉備の名方の濱の宮（岡山市北区番町、伊勢神社か）
6 倭の御室の嶺の上の宮（桜井市三輪、三輪山あたり）
倭姫は神々の住む山と崇められていた三輪の地から、大御神を戴き奉り、お心に叶う

7 倭の宇多の秋の宮（奈良県宇陀市大宇陀、阿紀神社か）
8 大和の佐佐波多の宮（宇陀市榛原、篠畑神社か）
阿紀神社は、天照大御神を祭神とし、水田に囲まれた杉木立の中に屋根に十本の鰹木が並ぶ神明造の本殿が建つ。宇陀の阿貴野は神武天皇東征の由緒ある地でもあり、ここで倭姫は四年間、お祀りしている。広い境内の中央には趣きある能舞台があり、六月には新能が催されるという。篠畑神社も、大きな鳥居をくぐって石段を上っていくと神明造の本殿があり、天照大御神を祭神としている。倭姫とこの地で出会った童女が、神にお仕えする「大物忌」として旅に同行することになったことが記されている。
9 伊賀の隠市守の宮（三重県名張市平尾、宇流富志禰神社か）
10 伊賀の穴穂の宮（伊賀市上神戸、神戸神社か）
神戸神社は広々とした田園の中、樹木が生い茂る境内に、神宮の古材を譲り受けて造営されたという茅葺・神明造の本殿が建つ。倭姫はここで四年間お祀りされ、御饌のために神田や鮎が献上されたことと記されている。神宮との関わり

11 伊賀の敢都美恵の宮（伊賀市栢植町、都美恵神社あたりか）
12 淡海の甲可日雲の宮（滋賀県甲賀市土山町、垂水頓宮跡あたりか）
13 淡海の坂田の宮（米原市近江町、坂田神明宮あたりか）
は今なお深く、六月の月次祭には毎年、干鮎千八百尾が献納されるという。

14 岐の宮（岐阜県岐阜市）
15 名古屋の宮（名古屋市中区）
16 伊勢の宮（伊勢市）
17 伊勢の宮（伊勢市）
18 伊勢の宮（伊勢市）
19 伊勢の宮（伊勢市）
20 伊勢の宮（伊勢市）
21 伊勢の宮（伊勢市）
22 伊勢の宮（伊勢市）
23 伊勢の宮（伊勢市）
24 伊勢の宮（伊勢市）
25 皇大神宮（伊勢市）



倭の笠縫邑とされる檜原神社（奈良県桜井市）

14 岐の宮（岐阜県岐阜市）
15 名古屋の宮（名古屋市中区）
16 伊勢の宮（伊勢市）
17 伊勢の宮（伊勢市）
18 伊勢の宮（伊勢市）
19 伊勢の宮（伊勢市）
20 伊勢の宮（伊勢市）
21 伊勢の宮（伊勢市）
22 伊勢の宮（伊勢市）
23 伊勢の宮（伊勢市）
24 伊勢の宮（伊勢市）
25 皇大神宮（伊勢市）

14 岐の宮（岐阜県岐阜市）
15 名古屋の宮（名古屋市中区）
16 伊勢の宮（伊勢市）
17 伊勢の宮（伊勢市）
18 伊勢の宮（伊勢市）
19 伊勢の宮（伊勢市）
20 伊勢の宮（伊勢市）
21 伊勢の宮（伊勢市）
22 伊勢の宮（伊勢市）
23 伊勢の宮（伊勢市）
24 伊勢の宮（伊勢市）
25 皇大神宮（伊勢市）



篠畑神社（奈良県宇陀市）



神戸神社（三重県伊賀市）

お多福とともに 岩戸屋は 今も昔も肉宮前 金時生姜を使った 岩戸屋の生姜糖 一口サイズ 剣先形

伊勢・内宮前おはらい町 岩戸屋 TEL 0596・23・3188 FAX 28・1322

ゆとりとやすらぎの宿 神宮会館 一般財団法人 伊勢神宮崇敬会 早朝参拝のご案内をしています。 https://www.jingukaikan.jp

二千年昔の宮々の旧跡
田園風景の中「鎮守の杜」に今も残る

美濃・尾張を経て
伊勢国へ

14 美濃の伊久良河の宮（岐阜県瑞穂市居倉、天神神社あたりか）

天神神社は一面に広がる田畑の中、樹々に囲まれた境内に能舞台のような大きな拝殿がある。本殿の後ろに回ると、御神木のタブの大樹の横に「御船代石」と呼ばれ神の宿る石と伝えられる大石が二つ並び、後方に天照大御神と倭姫命を祀る境内社が建っている。周辺からは鏡や勾玉などが出土し、古代の祭祀遺跡として保護されているという。

15 尾張の中嶋の宮（愛知県一宮市今伊勢町本神戸、酒見

神社あたりか）

16 伊勢の桑名の野代の宮（三重県桑名市多度町下野代、野志里神社あたりか）

17 鈴鹿の奈具波志の忍山の宮（亀山市野村、忍山神社あたりか）

18 伊勢の藤方の片樋の宮（津市藤方、加良比乃神社か）

19 伊勢の飯野の高宮（松阪市山添町、神山神社あたりか）

20 伊勢の佐佐江の宮（多気郡明和町山大淀、竹佐々夫江神社あたりか）

21 伊勢の伊藤の宮（伊勢市磯町、磯神社か）

22 伊勢の瀧原の宮（度会郡大紀町瀧原、瀧原宮）

23 伊勢の矢田の宮（伊勢市楠部町、矢田宮跡）

24 伊勢の家田の田上の宮（伊勢市楠部町、神宮神田あたり）



野志里神社。伊勢国に入って一番初めの巡行地（三重県桑名市）

五十鈴川を遡り
永遠の宮地へ

倭姫命は、大神のお教えに従って、伊勢の国の中で最上の宮地を求めて西に東に、さらに南へと旅を続ける。

21 伊勢の伊藤の宮（伊勢市磯町、磯神社か）

22 伊勢の瀧原の宮（度会郡大紀町瀧原、瀧原宮）

23 伊勢の矢田の宮（伊勢市楠部町、矢田宮跡）

24 伊勢の家田の田上の宮（伊勢市楠部町、神宮神田あたり）

25 伊勢の奈尾の根の宮（伊勢市今在家町、津長神社あたり）

小船で外城田川から宮川を遡り瀧原へ。南に下って二見の浜を廻り、五十鈴川を上流へ。この行程は『世記』にのみ詳しく記されている。

そしてついに倭姫は、五十鈴の河上に天照大御神の御鎮



田園の中に建つ「佐佐江宮跡」の石碑（三重県明和町）

座に相応しい場所を得られた。この時、川の際で長い旅の汚れを落とすように御裳の裾をお洗ひになり、その川の辺

「御裳裾川」と名付けたという。垂仁天皇の御代二十六年の冬と記されている。
（関連書籍のご案内）
「倭姫命の御巡幸」 楠木勝俊著・岡田登監修
神宮のお膝元で生まれ育った著者が、倭姫命の功績をより多くの人に知ってもらいたいと、古文獻の記述に基づき取材活動を続けて出版。（1650円）
お問合せ▽株式会社アイブレン
TEL 0596-27-1111



内宮神域の五十鈴川の御手洗場

で事に与りました。
延佳・弘正は当時伊勢の学問の中心となつた祠宮で、宮崎文庫創立の首唱者です。殊に自著『陽復記』が、後光明天皇の勅覧に浴すなどして、近世初期の神道学者として名を馳せた延佳の功績を妬む者によって、その社が「旧地にあらざ」という理由で破却されてしまったのは残念なことです。



延佳・弘正の隠岡遺跡

近世における倭姫命奉祀

文／神宮司庁広報室次長 音羽 悟

中期の外宮権禰宜河崎延貞（神境紀談）や守良の考証から、泉寺は常明寺、尾上社は倭姫命を奉祀する社と判断します。永保二年（一〇八二）の奥書をもつ「高庫蔵等秘抄」に「尾部御陵」

寺の門外に社を建て、倭姫命をお祀りしました。今日石柱のみで往時を偲ぶ常明寺は、近世には境内も広く、権勢を誇りました。このときの社の創祀には、出口延佳・與村弘正等が精長のもと

（倭姫命御陵に比定）の名がみえ、この地はかつて度会氏の氏寺常明寺（明治二年廃寺）の境内でありました。また別に寛文十三年（一六七三）大宮司大中臣（河辺）精長が常明

（おとわさとの）：神宮司庁広報室次長。滋賀県生まれ、平成四年に皇學館大学大学院博士前期課程国史学専攻修了。神宮研修所講師、皇學館大学神職養成室明階総合課程検定講師も務める。著書に神道文化叢書第39輯「悠久の森―神宮の祭祀と歴史―」ほか。



倭姫命御陵と常明寺跡の碑
類集」の中の「二所太神宮参拝儀式」に遙拝として、撰社十六座等と共に「倭

大

正十二年十一月五日、倭姫宮が倉田山の地に御鎮座して今年で百周年を迎えました。

十四所ある神宮の別宮の中で、別宮として創祀されたのは極めて新しく、それまでは倭姫命を奉祀したお社は無かったのか、と疑問を呈する人もおられるようです。

江戸時代初期の外宮宮掌大内人與村弘正が外宮相伝本を編集した「神拝式

「大」正十二年十一月五日、倭姫宮が倉田山の地に御鎮座して今年で百周年を迎えました。十四所ある神宮の別宮の中で、別宮として創祀されたのは極めて新しく、それまでは倭姫命を奉祀したお社は無かったのか、と疑問を呈する人もおられるようです。江戸時代初期の外宮宮掌大内人與村弘正が外宮相伝本を編集した「神拝式類集」の中の「二所太神宮参拝儀式」に遙拝として、撰社十六座等と共に「倭姫命を祀りするお社が神都

に存在したと私は推測しています。さらに南北朝時代にまで遡ると考えます。当時の外宮禰宜村松家行の著『類聚神祇本源』の外宮別宮篇に「尾上社」が「泉寺の西にあり」とみられ、江戸

（倭姫命御陵に比定）の名がみえ、この地はかつて度会氏の氏寺常明寺（明治二年廃寺）の境内でありました。また別に寛文十三年（一六七三）大宮司大中臣（河辺）精長が常明

（おとわさとの）：神宮司庁広報室次長。滋賀県生まれ、平成四年に皇學館大学大学院博士前期課程国史学専攻修了。神宮研修所講師、皇學館大学神職養成室明階総合課程検定講師も務める。著書に神道文化叢書第39輯「悠久の森―神宮の祭祀と歴史―」ほか。

お子様向け出版物のご案内

ご購入はアイブレンのHP かアマゾンで。



神話と伊勢
日めくり万年カレンダー
個性あふれる神さまたちの31日分のショートストーリーです。
小冊子付
1,100円（税込）
A5サイズ化粧箱入り

犬のおかけ参り絵本
おかけ参り犬 おさん
犬がおかけ参りをしたという伝承にもとづく創作絵本です。
1,540円（税込）
A4変形 本文40頁

子どものおかけ参り絵本
伊勢まいりんくんがやってきた!!
伊勢まいりんくんは、(公社)伊勢市観光協会の公式キャラクターです。
1,500円（税込）
A4変形 本文44頁

お伊勢さん関係の出版物のご案内

ご購入は 伊勢文化舎のHP、アマゾンで。

第62回ご遷宮記念
伊勢のお木曳
神領民のこころと技を伝える、お木曳行事の全てが分かる本。全79奉曳団を完全収録。
1,540円（税込）
B5判 256頁

改訂版
お伊勢さん
125社めぐり
伊勢神宮の撰社・末社など、全125社の鎮座の由緒や周辺の歴史・文化を解説した、持つてあるけるガイド本。
1,430円（税込）
A5判160頁

